

いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について^{1,2)}

荒 木 剛
東北大学文学研究科

いじめ被害体験者が青年期後期において示す不適応状態に関して、レジリエンス (resilience) 研究の枠組みに基づき、対人的ストレスイベントとコーピングスタイルをそれぞれ脆弱性因子及び保護因子として取り上げ、青年期後期の適応状態に対する効果をいじめ被害体験者/非被害体験者間で比較・検討した。大学生及び専門学校生 301 名 (平均年齢 19.66 歳, $SD=1.29$) を対象とした質問紙調査により、いじめ被害体験者は青年期後期において特に対人的ストレスイベントを多く体験しているわけではなくにもかかわらず、非被害体験者よりも適応状態が悪い傾向が見られた。この傾向は男性の方が強く、いじめ被害開始時期は無関係であることも同時に示された。また、被害体験者においては保護因子として問題解決型・サポート希求型コーピングが補償的に機能していることを示唆する結果が得られた。

キーワード：レジリエンス、いじめ被害体験、コーピング、青年期後期

問題と目的

小・中学校におけるいじめ (peer victimization/bullying) が、深刻な問題として国内において広く認知されるようになって久しい。文部科学省はいじめを「自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないこととする」と定義したうえで、1986 年度以降、統計を取り続けている。それによると、2003 年度の公立の小・中・高等学

校及び特殊教育諸学校におけるいじめ発生認知件数は 23,351 件で、8 年ぶりに増加に転じたことが報告されている (文部科学省 HP : 「生徒指導上の諸問題の現状について」 [http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/08/04082302.htm])。このような状況を背景に、心理学はもちろん、教育学や社会学など複数の学問領域でいじめに関する研究は今日まで盛んに行われてきた (神村・向井, 1998; 森田・清永, 1994)。これらの研究の蓄積を通じて、いじめが発生する集団の構造、加害者あるいは被害者となった児童・生徒の諸特徴等に関して多くの知見が得られている。

しかしいじめは、当事者にとっては終息したからといってそれで終わるような問題ではない。海外で発表されたものも含めて先行研究を概観すると、被害者には抑うつ、自尊心の低下、心身症、対人不安などの不適応症状が表れ (Hawker & Boulton, 2000; 岡安・高山, 2000)、それらのうち

- 1) 本研究は、平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費: 課題番号 14010809) の援助を受けて行われた。
- 2) 本論文の執筆にあたりご指導頂きました東北大学仁平義明教授、調査実施にご協力頂きました東北大学大淵憲一教授並びに学生の皆様に深く感謝申し上げます。

のいくつかは被害後数年が経過した青年期後期においても見られる場合があることが知られている。

例えば、Olweus (1993) は男性 87 名を対象に縦断的調査を実施し、13~16 歳時にいじめを受けていた者は 23 歳時において抑うつ的であること、その効果は 13~16 歳当時にいじめ被害により呈していた不適応の程度に影響されていることを明らかにした。この研究は、サンプル数が少ないことから結果の過度の一般化は危険ではあるが、いじめ被害の後遺症とも呼べる不適応状態（抑うつ）が少なくとも 7~10 年ほど持続する可能性があることを示したものと評価できる。また、坂西 (1995) は大学生を対象とした回顧的調査を行い、被害体験者は当時の心理的苦痛が大きいほど、活動意欲の減退や抑うつ感等を強く感じていることを報告している。他にも、回顧的方法を用いていじめと被害者の被害後の適応状態との間に関連を見出した研究がいくつか見受けられる（香取, 1999; Roth, Coles & Heimberg, 2002）。

以上の結果をまとめると、いじめ被害の後遺症とも呼べる不適応状態（抑うつ、不安等）は少なくとも青年期後期まで持続し、その強さはいじめ被害体験の程度に一定の影響を受けるものと考えられる。しかし、坂西 (1995) や香取 (1999) では必ずしもいじめが被害者の被害後の適応状態に悪影響を及ぼすばかりではないことを示す結果が得られており、いじめ被害経験と被害者のその後の適応状態との間を媒介する変数の存在が強く示唆される。

これに関連して、いじめ被害者が被害後数年が経過してもなお不適応状態にある理由について、Roth et al. (2002) は以下のように推測している。まず、いじめを受けることで、被害者は社会的状況を常に警戒が必要な危険な場であると知覚するようになる。被害者は社会的状況を回避するようになり、それが年齢相応の社会的スキルの学習・実践の機会の減少という事態を招いてしまう。これは同時に、社会的状況は危険であるとの彼らの

認識と矛盾するようなポジティブな出来事を体験する機会から、彼ら自身を遠ざけることにもなる。結果として、被害者は社会的状況を危険で苦痛な場面と感じ続けることになり、不適応状態が持続することになる。

この説明は、いじめ被害体験が被害者並びに被害者と周囲の人々との関係に好ましくない連鎖的变化を引き起こし、それが数年間に渡って維持あるいは強化されていくために、被害後数年が経過しているにもかかわらず不適応状態が持続すると考える悪循環モデルであると言える。この説明に従うと、いじめ被害体験と被害者のその後の適応状態との間を媒介する変数としてはこの悪循環を維持・強化する要因、または打破する働きをする要因の 2 種類が考えられるが、残念ながら Roth et al. (2002) ではそれらの要因について何も触れられてはいない。

ところで、深刻なストレスイベントと発達あるいは適応状態との間の媒介変数に関する問題に焦点を当てた研究は、近年レジリエンス (resilience) という概念を中心にして蓄積が進んでいる。しかしながらレジリエンスの定義に関しては研究者間で一致が見られず、現状では様々なものが並立している状態にある。それらを大別すると、レジリエンスを性格特性として定義する立場 (Jew, Green & Kroger, 1999; Wagnild & Young, 1993 等) と、プロセスあるいは結果として定義する立場 (Luthar, Cicchetti & Becker, 2000; Masten & Reed, 2002 等) に分けられる。

性格特性として定義する立場においては、ストレスイベントに対して高い耐性を有することを指して、レジリエンスもしくはレジリエンシー (resiliency) という言葉が用いられている。しかしこの立場に対しては、逆境下における個人の適応プロセスの詳細を明らかにすることができない、予防的介入を行うための手がかりとなる知見が得られにくいという批判が加えられている (Reynolds, 1998)。また、hardiness (Kobasa, 1979)

等の類似した概念が複数あるが、それらとの関係付けも不明瞭である。

これに対して、プロセスあるいは結果として定義する立場においては、“著しい逆境に置かれているにもかかわらず、良好な適応が達成されていく動的な過程” (Luthar et al., 2000) といった定義が為されている。“著しい逆境”としては、精神障害を抱える両親による養育、両親の離婚、児童虐待、貧困等が取り上げられ、研究が行われている (Glantz & Johnson, 1999; Luthar, 2003)。プロセス／結果派におけるレジリエンス研究の目的は、これらの心身の発達に悪影響を及ぼす恐れが大きい危険因子 (risk factors) と、危険因子の効果を強める脆弱性因子 (vulnerability factors)、及び危険因子の効果を緩和する保護因子 (protective factors) の相互作用の詳細を明らかにし、危険因子への曝露によって生じる不適応状態に対する予防的介入方法の開発に向けた手がかりを示すことにある (Luthar & Cicchetti, 2000)。しかし現在のところは、特定の危険因子に影響する脆弱性因子及び保護因子の組み合わせを探ることに研究の主眼が置かれているようである。例えば、危険因子として児童虐待を取り上げた研究では (Bolger & Patterson, 2003)、内的統制感及び互惠性のある友人関係がそれぞれ有効な保護因子として機能していることが確認されている。

本研究では、性格特性として定義する立場に対して向けられている批判を踏まえ、上記のプロセス／結果派の定義 (Luthar et al. 2000) を採用して、いじめ被害体験の長期的影響に関する問題への適用を試みる。いじめ被害体験という危険因子に特徴的な脆弱性因子及び保護因子を特定することが、いじめ被害者が長期に渡って示す不適応症状に対する効果的な予防法あるいは対処法を開発するための出発点になるのではないかと考えるためである。また、レジリエンスというプロセス自体は特定の時期や期間内に限定して見られるものではなく、一生涯に渡って進行していくものであ

るとされる (Masten & Powell, 2003)。いじめ被害体験の長期的影響については、現在のところ少なくとも青年期後期までは持続する恐れのあることが示されているため、特に青年期後期という時期におけるいじめ被害体験者のレジリエンスの達成に寄与する要因を特定することを本研究の目的とする。

上述のように、いじめ被害者にはいじめ消失後も数年間に渡って様々な不適応症状 (抑うつ、不安等) が見られる傾向があるが、これらの症状が被害後数年を経てほとんど見られない状態を“良好な適応”とし、この状態を実現している被害者にレジリエンスが見られたと考える。すなわち本研究においては、いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンスを“児童期及び青年期前期のある一定の期間に、いじめという一連のストレスイベントに曝されたにもかかわらず、被害後数年が経過した青年期後期において、それらの後遺症とも言える不適応症状 (抑うつ／不安等) を呈していない状態”として操作的に定義する。

いじめ被害の時期と数年後の適応状態との関係について検討している研究は見当たらないが、Roth et al. (2002) の想定する悪循環がより早期に始まっていた場合の方が年齢相応の社会的スキルの学習に支障を来すと考えられる。また、被害直後に呈していた反応が深刻なものであるほどこの悪循環の形成は早まり、結果として数年後の適応状態を損なわせる方向に働くと考えられる。加えて、いじめ行為の種類や内容によってこの悪循環の形成に違いが出てくるとも予想される。本研究では、いじめ被害の開始時期、被害直後に呈していた反応、いじめ行為の内容と青年期後期の適応状態との関連についても検討の対象としたい。

青年期後期の適応状態に対する危険因子としての児童期のいじめ被害体験の効果に影響する脆弱性因子及び保護因子としては、上述の Roth et al. (2002) に基づき、青年期後期において体験している対人的ストレスイベント、及びそれらに対する

コーピングスタイルを取り上げる。Roth et al. (2002) が想定している悪循環が実際に生じているならば、対人的ストレスイベントは被害者を社会的状況からさらに遠ざける働きをし、被害者の適応状態のさらなる悪化を招くと考えられる。また、それらの対人的ストレスイベントに対して適切に対処できるかによってこの悪循環を打破できるかが決定されると考えられることから、保護因子としてはコーピングスタイルを取り上げることにした。

以上のことから、本研究においては以下の4つの仮説が検討される。仮説1：児童期あるいは青年期前期にいじめを受けた経験のある者は、同じ時期に被害体験の無い者と比べて、青年期後期において抑うつ的で強い不安を感じている。仮説2：青年期後期において被害体験者が示す不適応の程度（高抑うつ、高不安）は、被害を受け始めた時期が早く、被害直後に呈していた反応がより深刻なものであったほど大きなものとなる。仮説3：青年期後期においては、いじめ被害体験者のレジリエンスの達成を妨害する脆弱性因子として対人的ストレスイベントが関係している。仮説4：青年期後期においては、いじめ被害体験者のレジリエンスの達成を促進する保護因子としてコーピングスタイルが関係している。これらに加えて、どのような内容の対人的ストレスイベント及びコーピングスタイルがそれぞれ脆弱性因子及び保護因子として機能しているかについても探索的に検討する。

なお本研究では、児童期及び青年期前期のいじめ被害体験に関する部分については回顧的方法によりデータ収集を行っている。諸変数間の関係を検討するには縦断的方法を用いるべきだが、今回敢えて回顧的方法を用いる理由は以下の通りである（神村・向井, 1998）。①羞恥心や恐れ、社会的望ましさなどの影響を最小限に見積もることができる、②いじめを経験した際の物理的・心理的状况を、むしろ客観的かつ冷静にふりかえる余裕

がある中で正直で率直な反応が得られやすい、③多感な小・中学生に直接回答を求めることにより、彼らの学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けることができる、④いじめの収束のプロセスや、いじめの経験がその後の心理的諸変数に及ぼす影響などをあわせて測定することができる。

方 法

調査対象者と手続き

調査対象者は大学生及び専門学校生で、それ以外の者も若干名含まれていた。大学生・その他には個別に質問紙、謝礼品、回収用封筒を配布し、回答を求めた。専門学校生には授業時間中に同じく質問紙、謝礼品、回収用封筒を配布し、回答を求めた。どちらにおいても、まず調査の目的を説明したうえで、協力は完全に任意であること、協力したくない場合には白紙のまま提出してかまわないことを、口頭と質問紙の冒頭部分で教示した。大学生は自宅で、専門学校生はその授業時間中に、それぞれ質問紙に回答した。回答済みの質問紙は回収用封筒に密封され、回収された。フィードバック希望者には、後日、報告書の郵送という形でフィードバックが行われた。

回収された質問紙から協力拒否や記入漏れ等のあるものを除いた、301名分のデータ（大学生：155名、専門学校生：142名、その他：4名／男性：121名、女性：180名）が分析の対象となった。平均年齢は19.66歳、SDは1.29であった。回収率については、大学生・その他が65.96%、専門学校生が83.04%となり、全体としては73.06%となった。

質問紙の構成

(a) 過去のいじめ被害体験についての質問

まず被害体験の有無について、「ある」、「ない」の2件法で回答を求めた。なお、調査の実施に際して、どのような行為をいじめと見なすのか、すなわちいじめの定義に関して調査協力者間で解釈

が一致していない可能性が懸念された。しかし、先行研究においていじめの定義の中に共通して含まれる要素は攻撃行動の反復性・継続性及び被害者の深刻な苦痛感であって、いじめ行為の内容や程度について言及しているものは少ない。従って本研究では2件法という形式を用いることで、過去にいじめと認識できるような一連の攻撃行動に曝された経験があるという被害感の有無を最初に確認するという方法を採用した。

次に「ある」と回答した被害体験者に対し、被害開始時期について「小学校入学以前」、「小学校低学年」、「小学校高学年」、「中学生」、「高校生」のいずれか1つを選択するように求めた。続いて、被害直後に表れた反応として被害当時の体調および出席状況の変化に関して、体調は「a. 大した影響は受けず、体調にも特に変化は起きなかった」、「b. 辛かったが、それほど体調が悪くなるようなことはなかった」、「c. 辛くて、時々（1週間くらい）体調が悪くなることがあった」、「d. とても辛くて、長い間（1ヶ月、あるいはそれ以上）体調が悪くなることがあった」の中から1つを選択するように求めた。同様に、出席状況については「a. 大した影響は受けず、学校を休むことはなかった」、「b. 辛かったが、学校を休むほどにはならなかった」、「c. 辛くて、時々（1週間くらい）学校を休むことがあった」、「d. とても辛くて、長い間（1ヶ月、あるいはそれ以上）学校を休むことがあった」の中からそれぞれ1つを選択するように求めた。複数の被害体験を有する場合には、その中で最も印象に残っている被害体験の直後の反応について回答するように教示した。なお、これらの選択肢を作成するにあたっては坂西(1995)を参考にした。

いじめの種類や内容について尋ねるための項目については、Roth et al. (2002)などを参考にして独自に作成した。次に、それらを攻撃行動およびその関連領域の研究に従事している大学院生5名に当該の記述がいじめの定義に該当するかどうか、

文部科学省による先述の定義を示したうえで、「当てはまる」「当てはまらない」の2件法により評定を求めた。このうち、5名中4名以上が「当てはまる」と評定した9項目（Table 2参照）を、被害内容を尋ねる項目として用いることにした。被害体験者には、これら9項目で表される内容のいじめ行為の被害頻度について、「ほとんどなかった」（1点）～「よくあった」（4点）の4段階で評定してもらった。

(b) TAC-24（神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995）

コーピングスタイルについて測定する尺度。「情報収集」、「放棄・諦め」、「肯定的解釈」、「計画立案」、「回避的思考」、「気晴らし」、「カタルシス」、「責任転嫁」の8種類のコーピングスタイルを測ることができる。また、神村ら(1995)はこれらに対して2次因子分析を実施し、「問題解決・サポート希求」（「情報収集」・「計画立案」・「カタルシス」が負荷）、「問題回避」（「放棄・諦め」・「責任転嫁」が負荷）、「肯定的解釈と気晴らし」（「肯定的解釈」・「回避的思考」・「気晴らし」が負荷）という3因子が存在することを確認している。

「問題解決・サポート希求」は問題の解決を志向して情報を集めたり具体的な計画を練る、他者からの助言を求めるまたは相談に乗ってもらうといった種類のコーピングスタイルである。「問題回避」は問題の解決を放棄してそのままにする、他者に責任をなすりつけるといった内容のコーピングスタイルである。「肯定的解釈と気晴らし」はストレスイベントに直面することから生じるネガティブな内容の思考を抑制したり解釈を変更したりする、他の活動に没頭することで注意をそらすといった種類の情動調整を主眼に置いたコーピングスタイルである。

項目数は8種類の各コーピングスタイルにつき3項目ずつ、計24項目である。実施の際には教示文の一部を変更し、特に対人的ストレスイベント

に対処する場合に採用するコーピングについて回答するよう求めた。評定は、「そのようにしたこと（考えたこと）はこれまでにない。今後も決してないだろう」（1点）～「いつもそうしてきた（考えてきた）。今後も常にそうするだろう」（5点）の5件法で行われた。

(c) 対人ストレスイベント尺度（橋本，1997）

大学生が比較的良好に体験するとされる種類の対人的ストレスイベントに関する尺度。内容的に青年期後期の者が多く体験する種類のものを取り上げているため、今回のサンプルに対して使用可能であると判断した。「対人葛藤」、「対人劣等」、「対人磨耗」の3つの下位尺度を有する。

「対人葛藤」は他者から攻撃を受けたり非難されたりする、他者とトラブルになるといった内容のストレスイベントである。「対人劣等」は対人場面において他者からの評価について気に病んだり、疎外感を感じるといった種類のストレスイベントである。「対人磨耗」は対人場面において他者との相互作用に微妙なズレを感じたり、会話の内容や進行が不快感を喚起させるものであったという内容のストレスイベントである。

質問紙全体の項目数を無理なく回答できる範囲内に抑えるため、オリジナルの各下位尺度から因子負荷量の高い項目を5項目ずつ抜き出して用いた。評定は、「全くなかった」（1点）～「しばしばあった」（4点）の4件法で行われた。

(d) 多次元抑うつ不安症状尺度（佐藤・安田・児玉，2001）

いじめ被害体験者の現在の適応状態を反映する変数としては、抑うつ及び不安を取り上げることとした。先述のように、いじめ被害体験者の現在の抑うつ及び不安の程度が軽度なほどレジリエンスを達成していると考えることが出来る。

多次元抑うつ不安症状尺度は、Clark & Watson (1991) が提案した、抑うつ並びに不安症状を抑うつと不安に共通するネガティブ情動の亢進、抑うつ特有のポジティブ情動の低下、不安特有の自律

神経症状の3次元でとらえるモデルに基づくものである。「ネガティブ情動」、「生理的覚醒」、「ポジティブ情動」の3つの下位尺度を有する。質問紙全体の項目数を考慮し、(c)と同様にオリジナルの各下位尺度から因子負荷量の高い項目を5項目ずつ抜き出し使用した。評定は、「全く当てはまらない」（1点）～「よく当てはまる」（4点）の4件法で行われた。

結 果

過去のいじめ被害体験について (Table 1)

いじめ被害の有無に関する質問に対して、全体の37.9%の者が「ある」と回答していた。男女別では、男性は32.2%、女性は41.7%となった。調査協力者の属性別では、大学生・その他は35.2%、専門学校生は40.9%となった。

被害開始時期については「小学校高学年」が41.2%と最も多く、次いで「小学校低学年」の33.3%、「中学校」の17.5%、「小学校入学以前」(6.1%)、「高校」(1.8%)と続いていた。被害直後に呈していた反応については、体調(b:「辛かったが、それほど体調が悪くなるようなことはなかった」(58.8%))においても、出席状況(b:「辛かったが、学校を休むほどにはならなかった」(56.1%))においても、苦痛を感じながらも顕著なストレス反応は示さなかったという回答が、全体でも男女別でも最も多かった。また、体調の点でも出席状況の点でも、被害直後は女性の方が比較的深刻なストレス反応を示していた傾向にあった。

次に、被害内容について測定する9項目(Table 2)に対して因子分析(主成分分析、バリマックス回転)を実施した。固有値の減退状況や解釈の容易さ等を考慮し、複数の因子に負荷する項目を削除するという手続きを何度か繰り返して、最終的に「身体的暴力」($\alpha=.78$)と「悪口/仲間外れ」($\alpha=.76$)のそれぞれ3項目から成る2因子が抽出された。これらの6項目で、分散の69.89%を説明していた。また、両尺度得点の違いを男女間

Table 1 男女別のいじめ被害体験率、被害開始時期及び被害直後の反応の割合 (%)

	男性		女性		全体		
被害体験率 (%)	32.2	(39) (N=121)	41.7	(75) (N=180)	37.9	(114) (N=301)	()内は度数
被害開始時期 (%)							
「小学校入学以前」	10.3	(4)	4.0	(3)	6.1	(7)	()内は度数
「小学校低学年」	25.6	(10)	37.3	(28)	33.3	(38)	
「小学校高学年」	30.8	(12)	46.7	(35)	41.2	(47)	
「中学校」	30.8	(12)	10.7	(8)	17.5	(20)	
「高校」	2.6	(1)	1.3	(1)	1.8	(2)	
		(N=39)		(N=75)		(N=114)	
被害直後の反応 (%)							
(体調)							
a	28.2	(11)	21.3	(16)	23.7	(27)	()内は度数
b	64.1	(25)	56.0	(42)	58.8	(67)	
c	5.1	(2)	17.3	(13)	13.2	(15)	
d	2.6	(1)	5.3	(4)	4.4	(5)	
		(N=39)		(N=75)		(N=114)	
(出席状況)							
a	46.2	(18)	32.0	(24)	36.8	(42)	
b	51.3	(20)	58.7	(44)	56.1	(64)	
c	2.6	(1)	6.7	(5)	5.3	(6)	
d	—	(0)	2.7	(2)	1.8	(2)	
		(N=39)		(N=75)		(N=114)	
(体調)							
a:	「大した影響は受けず、体調にも特に変化は起きなかった」						
b:	「辛かったが、それほど体調が悪くなるようなことはなかった」						
c:	「辛くて、時々 (1週間くらい) 体調が悪くなるがあった」						
d:	「とても辛くて、長い間 (1ヶ月, あるいはそれ以上) 体調が悪くなるがあった」						
(出席状況)							
a:	「大した影響は受けず、学校を休むことはなかった」						
b:	「辛かったが、学校を休むほどにはならなかった」						
c:	「辛くて、時々 (1週間くらい) 学校を休むがあった」						
d:	「とても辛くて、長い間 (1ヶ月, あるいはそれ以上) 学校を休むがあった」						

Table 2 いじめ被害の内容に関する項目の因子分析結果

項目	I	II
1 理由もなく殴られたり蹴られたりした	.911	-.001
4 顔を合わせると叩かれることがあった	.801	-.001
9 よく物を投げつけられることがあった	.776	.169
7 陰でコソコソと悪口を言われた	-.001	.897
3 のけ者にされることが多かった	-.001	.805
5 よく悪口を言われた	.251	.754
固有値	2.143	2.051
寄与率 (%)	35.713	34.181
α	.78	.76

(削除された項目)

- 2 嫌なあだ名で呼ばれることが多かった
- 6 何か悪いことが起こると、いつも自分のせいにされた
- 8 持ち物を隠されることがよくあった

で t 検定を用いて検討したところ、「身体的暴力」においては男性の方が ($t(112)=4.844, p<.001$), 「悪口/仲間外れ」では女性の方が ($t(112)=-2.255, p<.05$), それぞれ有意に高い得点を示していた (Table 6).

青年期後期の適応状態と過去のいじめ被害体験の関係について

現在の適応状態を反映する変数である抑うつと不安を測定するために実施した多次元抑うつ不安症状尺度については、オリジナルの尺度から項目を抜粋して使用したため、分析を行う前に因子構造を再確認する手続きが必要であると判断した。因子分析 (主成分分解, バリマックス回転) を因子

数を3に指定して複数の因子に負荷する項目を削除するという手続きを行ったところ、オリジナルとほぼ同様の構造の3因子解が得られた (Table 3)。それぞれオリジナルと同一の因子名が採用され、 α 係数は「ネガティブ情動」が $\alpha=.86$ 、「ポジティブ情動」が $\alpha=.74$ 、「生理的覚醒」が $\alpha=.68$ となった。これらの3因子で、全分散の57.71%を説明していた。この結果に基づき、抑うつ得点は、「ポジティブ情動」尺度の各項目を「ネガティブ情動」尺度の逆転項目として計算し、これに「ネガティブ情動」尺度得点を加えることにより算出された。また、不安得点は、「ネガティブ情動」得点に「生理的覚醒」得点を加えることにより算出された。

抑うつ、不安のそれぞれについて、性別 (男性 vs. 女性) × 被害体験 (有 vs. 無) の2要因分散分析を行った。各変数の平均得点及びSDをTable 6に示す。分析の結果、両者とも被害体験の主効果が有意となり (抑うつ: $F(1,297)=5.393, p<.05$, 不

安: $F(1,297)=4.671, p<.05$)、被害体験の方が高い抑うつと不安を示していた。加えて、抑うつ ($F(1,297)=4.079, p<.05$)、不安 ($F(1,297)=3.175, p<.10$) のいずれにおいても有意、あるいは有意に近い交互作用が得られた。LSD法による多重比較 ($\alpha=0.05$) を行ったところ、被害体験の無い女性は被害体験の無い男性と比べて抑うつ的であるという結果が得られた。また、男性の場合は、被害体験者は非被害体験者に比べて抑うつ及び不安が高い傾向が見られた。

続いて被害者群のみにおいて、被害開始時期 (各群の人数に大きな違いが生じないように留意して時系列順に再分類: 「小学校低学年以前 ($N=45$)」 vs. 「小学校高学年 ($N=47$)」 vs. 「中学校以降 ($N=22$)」) を要因とした1要因分散分析を、抑うつと不安について実施した。その結果、いずれも有意な効果は得られなかった (Table 4)。被害直後の反応については、体調面及び出席状況面の選択肢 a から順に1点ずつ数値を与えて間隔尺度

Table 3 多次元抑うつ不安症状尺度の因子分析結果

項目	I	II	III
1 落ち込んでいる	.822	-.001	.204
4 悲しい	.813	-.001	.191
10 ゆううつだ	.769	-.318	.142
7 不安でいっぱいだ	.758	-.188	.123
13 自分に失望している	.675	-.242	.217
15 気力にあふれているように感じる	-.204	.745	-.001
6 自分に自信をもっている	-.275	.744	.100
9 自分の将来に希望をもっている	-.217	.684	-.001
3 機敏に動く	.140	.673	-.001
12 生きているという充実感がある	-.309	.557	-.001
5 筋肉が引きつったり、けいれんしたりする	-.001	-.001	.755
11 手が震えることがよくある	.163	-.001	.725
2 体の感覚がマヒしたりむずむずしたりする	.278	.001	.646
14 心臓が痛い	.300	-.001	.623
固有値	3.433	2.560	2.086
寄与率(%)	24.523	18.288	14.902
α	.86	.74	.68

(削除された項目)

- 8 のどにものがつまった、または胸がつまったような感じがする

項目番号は佐藤ら (2001) とは対応していない。

とし、青年期後期の抑うつ及び不安との間で Pearson の相関係数を算出した。その結果、被害直後の体調面の反応は青年期後期の不安と 5% 水準で有意な正の相関を示した ($r=.186$)。また、出席状況面の反応と青年期後期の抑うつ ($r=.219$) 及び不安 ($r=.206$) との間にもそれぞれ 5% 水準で有意な正の相関が見られた。

脆弱性因子としての対人的ストレスイベントの体験頻度について

脆弱性因子として取り上げた対人ストレスイベ

Table 4 再分類した被害開始時期別の抑うつ・不安得点

	小学校低学年以前 (N=45)	小学校高学年 (N=47)	中学校以降 (N=22)
抑うつ	27.00 (0.89)	26.70 (0.94)	26.18 (0.89)
不安	17.20 (0.86)	16.89 (0.78)	16.00 (1.01)

() 内の数値は標準偏差を表す。

ント尺度については、オリジナルの尺度より項目を抜粋して使用したため因子構造を再確認する手続きが必要と判断した。因子分析（主成分分解、バリマックス回転）を因子数を 3 に指定して複数の因子に負荷する項目を削除するという手続きを行ったところ、オリジナルとはほぼ同様の構造の 3 因子解を得ることができた (Table 5)。それぞれオリジナルと同一の因子名が採用され、 α 係数は「対人劣等」が $\alpha=.79$ 、「対人葛藤」が $\alpha=.69$ 、「対人磨耗」が $\alpha=.68$ となった。これらの 3 因子で、全分散の 53.82% を説明していた。

「対人劣等」、「対人葛藤」、「対人磨耗」のそれぞれについて性別（男性 vs. 女性）× 被害体験（有 vs. 無）の 2 要因分散分析を実施したところ、「対人劣等」のみにおいて性別の主効果が有意となり ($F(1,297)=6.706, p<.01$)、女性の方が高い得点を示していた。被害体験の主効果及び交互作用は、いずれも有意ではなかった (Table 6)。

Table 5 対人ストレスイベント尺度の因子分析結果

項目	I	II	III
2 知人が自分のことをどう思っているのか気になった	.774	-.001	.001
8 周りの人から疎外されていると感じるようなことがあった	.745	.232	.001
5 相手が嫌な思いをしていないか気になった	.733	.001	.186
14 知人とどのようにつきあえばいいのか分からなくなった	.693	.263	.001
11 会話中に気まずい沈黙があった	.574	.316	.187
7 知人から責められた	.180	.793	.001
4 知人とけんかした	.112	.768	-.001
10 知人に軽蔑された	.196	.629	.136
1 知人に無理な要求をされた	.001	.536	.260
6 嫌いな人と会話をした	.001	.161	.797
9 あまり親しくない人と会話をした	.242	-.001	.756
3 テンポの合わない人と会話をした	.001	.102	.715
12 自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた	.001	.142	.509
固有値	2.661	2.188	2.147
寄与率(%)	20.469	16.831	16.516
α	.79	.69	.68

(削除された項目)

- 13 知人が無責任な行動をした
- 15 無理に相手に合わせた会話をした

項目番号は橋本 (1997) とは対応していない。

Table 6 各変数の男女別及び被害者／非被害者群別の平均得点と標準偏差

変数	被害体験者		非被害体験者	
	男性	女性	男性	女性
いじめ被害内容				
「身体的暴力」	4.90 (2.47)	3.29 (1.06)	—	—
「悪口／仲間外れ」	7.44 (2.69)	8.61 (2.62)	—	—
現在の適応状態				
「抑うつ」	27.15 (5.40)	26.49 (6.08)	23.90 (6.53)	26.27 (5.95)
「不安」	17.79 (5.23)	16.35 (5.43)	15.18 (5.54)	16.10 (5.26)
脆弱性因子（対人的ストレスイベント）				
「対人劣等」	12.69 (3.99)	13.59 (3.38)	12.29 (3.53)	13.67 (3.53)
「対人葛藤」	7.10 (2.75)	6.81 (2.46)	7.30 (2.92)	7.22 (2.60)
「対人磨耗」	10.26 (2.68)	10.65 (2.93)	10.46 (2.78)	10.99 (2.65)
保護因子（コーピングスタイル）				
「問題解決・サポート希求」	27.36 (6.55)	28.93 (6.89)	28.43 (7.91)	30.60 (6.26)
「問題回避」	13.03 (5.00)	12.16 (4.30)	13.78 (4.42)	13.37 (4.57)
「肯定的解釈と気そらし」	26.97 (5.51)	28.06 (7.13)	28.67 (6.45)	28.75 (6.10)

() 内の数値は標準偏差を表す。

保護因子としてのコーピングスタイルの採用頻度について

保護因子として取り上げたコーピングスタイルについては、上述のように神村ら(1995)がTAC-24で測定される8種類のコーピングスタイルの背後に「問題解決・サポート希求」、「問題回避」、「肯定的解釈と気そらし」の3因子が存在することを確認している。そのため、これら3因子の得点を分析に使用することとした。

「問題解決・サポート希求」、「問題回避」、「肯定的解釈と気そらし」のそれぞれについて性別(男性 vs. 女性)×被害体験(有 vs. 無)の2要因分散分析を実施したところ、「問題解決・サポート希求」において性別の主効果が有意となり

($F(1,297)=4.812, p<.05$)、女性の方が高い得点を示していた。また、「問題回避」において被害体験の主効果が有意傾向となり($F(1,297)=3.112, p<.10$)、非被害者群の方が高い得点を示していた。他に有意な効果は見られなかった(Table 6)。

いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンスに寄与する要因の検討：被害者／非被害者群間の比較

性別(男性=1, 女性=0のダミー変数)、脆弱性因子としての対人的ストレスイベント(「対人劣等」、「対人葛藤」、「対人磨耗」)、保護因子としてのコーピングスタイル(「問題解決・サポート希求」、「問題回避」、「肯定的解釈と気そらし」)を説明変数とした重回帰分析を、現在の適応状態を表す変数である抑うつ及び不安をそれぞれ基準変数として、被害者群・非被害者群別に実施した。結果をTable 7に示す。現在の抑うつの強さに影響する要因としては「対人劣等」と「肯定的解釈と気そらし」が被害者群・非被害者群ともに共通していたが、「問題解決・サポート希求」が被害者群のみにおいて有効な保護因子として機能していることが示された。また、非被害者群において「問題回避」が抑うつを高めるという結果が得られた。不安の場合は両群間で共通して有意な標準偏回帰係数を示した変数は「対人劣等」のみで、被害者群では「問題解決・サポート希求」が、非被害者群では「肯定的解釈と気そらし」が有効な保護因子としてそれぞれ機能していた。また、抑うつの場合と同様に、非被害者群のみにおいて「問題回避」が不安を高める方向に作用していることが示された。

考 察

本研究の目的は、いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンスの達成に寄与する要因としての、対人的ストレスイベント及びコーピングスタイルの効果について検討を加えることであった。以降、いじめ被害体験の長期的影響、脆

Table 7 性別、脆弱性因子、保護因子を説明変数とした重回帰分析結果

説明変数	被害体験者		非被害体験者	
	抑うつ	不安	抑うつ	不安
性別 (女性 = 0, 男性 = 1)	.028	.122	-.129*	-.011
脆弱性因子 (対人的ストレスイベント)				
「対人劣等」	.248**	.243*	.403***	.401***
「対人葛藤」	.020	.136	-.056	.011
「対人磨耗」	.068	.135	-.059	.004
保護因子 (コーピングスタイル)				
「問題解決・サポート希求」	-.252**	-.235**	-.032	.039
「問題回避」	.117	.059	.167*	.166*
「肯定的解釈と気そらし」	-.255**	-.069	-.281***	-.235***
R^2	.231***	.192***	.274***	.233***

表中の数値は標準偏回帰係数 (β). *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

弱性因子としての対人的ストレスイベントの効果、保護因子としてのコーピングスタイルの効果について順を追って考察していく。

いじめ被害体験の長期的影響については、被害体験の主効果が有意という結果が得られた。これは先行研究の結果を追認するものであり、いじめ被害体験者は被害後数年に渡って抑うつ的で不安の高い状態が続いている傾向にあることが確かめられたと言える。また性別と被害体験の交互作用が有意だったことから、この結果は男性の場合によく当てはまるものであると言える。いじめ被害体験の長期的影響に性差が見られることは、坂西 (1995) も報告している。これは、いじめ被害体験の内容に性差があり、殴る・蹴るといった身体的攻撃は男子に多く、無視したり仲間外れにしたりといった関係性攻撃は女子に多い (岡安・高山, 2000) ことが影響している可能性がある。本研究においても、「身体的暴力」は男性に、「悪口・仲間外れ」は女性に多いという結果を得ている。男性の方により強くいじめ被害体験の長期的影響が認められた理由としては、身体的に行われる暴力的行為が被害者にとって自分の非力さを直接的に思い知らされるものであることや、身体的に非力であるということが「男性」というジェンダーに馴染まない属性であることなどが考えられる。

いじめ被害の開始時期については、青年期後期の適応状態とは無関係であるという結果が得られた。これは、いじめ被害体験者の青年期後期の適応状態に対しては Roth et al. (2002) の想定する悪循環の形成時期が直接問題となるのではなく、この悪循環が青年期後期に至っても維持されているか否かの方が重要であることを示唆する結果である。また、被害直後に示していた反応と現在の適応状態との間に弱いながらも有意な相関が見られたことから、被害体験当時の被害感及び苦痛感が大きい者ほど長期的影響が長引く傾向にあることも示唆されたと言える。ただ、本研究の被害体験者の場合、被害直後の反応として苦痛を感じながらもそれほど深刻なストレス反応は示さなかった者が多かったことから、経験したいじめ行為そのものがそれほど深刻なものではなかった可能性もある。いじめ被害体験の深刻さと被害体験者の数年後の適応状態との関係をより細部に渡って明らかにするためには、非常に深刻ないじめを受けた被害体験者のみを対象とした調査などを実施する必要があるだろう。

脆弱性因子としての対人的ストレスイベントについては、青年期後期における体験頻度自体は被害者群/非被害者群間で違いはないという結果が得られた。いじめ被害体験者は青年期後期におい

て非被害体験者よりも適応状態が悪いという先述の結果と合わせて考えると、いじめ被害体験者は青年期後期において特に対人的ストレスイベントを多く体験しているわけではないにもかかわらず、非被害体験者と比べて適応状態が悪いことが示されたと言える。この結果は、被害体験者が青年期後期において呈している不適応状態に児童期のいじめ被害体験が影響していることを示唆するものであり、いじめ被害体験者に対する継続的な支援の必要性を示すものであると言える。

対人的ストレスイベントが現在の適応状態に及ぼしている効果については被害者／非被害者群間で類似した傾向が見られ、「対人劣等」のみが有意な効果を有しているという結果が得られた。「対人劣等」は対人場面において他者からの評価について気に病んだり、疎外感を感じるといった種類のストレスイベントである。被害体験者は他者からの評価に過敏になる傾向にあることが坂西(1995)や香取(1999)において指摘されていることから、対人的場面で他者からネガティブな反応を引き出さないように努めて振舞うことが適応状態を悪化させてしまうのではないかと推測される。しかし、 β 値を見ると「対人劣等」の影響力は被害者群よりもむしろ非被害者群の方が大きい。この理由としては、本研究ではいじめにおける役割を「被害者」と「非被害者」の2種しか設定しなかったことが関係している可能性がある。いじめが発生している集団内には、「被害者」と「加害者」だけでなく、「傍観者」、「観衆」といった役割を受け持つ者がいるとされている(森田・清永, 1994)。これに関連して、香取(1999)はいじめにおける役割をこれらの他に「被害者かつ加害者」、「仲裁者」を加えた6種類に分類して分析を行い、各役割によっていじめ被害体験の長期的影響に違いがあることを見出している。特に「傍観者」の場合、他者との同調傾向が強くなるという影響が確認されている。今回「非被害者」に分類された者の中には「加害者」や「傍観者」など、

「被害者」以外の全ての役割が含まれてしまっていた可能性も十分にあることから、今後は「非被害者」の中から「加害者」や「傍観者」などの役割を担っていたものを明確に分離した調査が求められる。

保護因子としてのコーピングスタイルの青年期後期における採用頻度については、被害者／非被害者群間で大きな違いはないことが示された。これは、被害体験者と非被害体験者の間でコーピングレパートリーに大きな違いはなく、両群共に同様の内容のコーピングを対人的ストレスイベントに遭遇した際に用いていることを表す結果である。しかし、青年期後期において被害体験者は非被害体験者よりも適応状態が悪いことから、被害体験者の場合は「知識」として様々なコーピングを知っていても、それらが有効な対処手段として機能していない恐れがあることがこの結果から示唆される。

また、被害者／非被害者群間で各コーピングスタイルの効果に違いが認められ、「問題解決・サポート希求」が被害者群においてのみ抑うつと不安を低減する働きをしていることが示された。最近のレジリエンス研究においては、危険因子への曝露により生じた不適応状態に間接的に働きかけ、結果として危険因子の効果を弱める働きをする保護因子を指して特に補償的因子 (compensatory factor) または促進的因子 (promotive factor) と呼び、直接的に危険因子の効果を緩和する要因と区別する動きがある (Luthar & Zelazo, 2003)。すなわち、青年期後期において被害体験者が示す不適応状態に対して、「問題解決・サポート希求」は補償的効果を有していることになる。

この理由としては、「問題解決・サポート希求」が問題の解決を志向して情報を集めたり具体的な計画を練る、他者からの助言を求めるまたは相談に乗ってもらおうといった内容のコーピングスタイルであり、これがいじめ被害体験者に不足しているとされる年齢相応の社会的スキルの学習を促す

ことが考えられる。非被害体験者において「問題解決・サポート希求」が有意な効果を示さなかったのは、非被害体験者は既に年齢相応の社会的スキルを学習していたためだと推測される。

またこの結果は、欧米で学校内における児童間のトラブルの解決と減少を目指して導入されているピア・サポートの有効性に対する傍証とも解釈できるだろう。介入プログラムとしてのピア・サポートは、スーパーバイザー役を務める大人がピア・ヘルパーとなる児童に対してカウンセリング技能や対人トラブルの解決法などを教え、いじめ等のトラブルを抱えて困っている児童の援助を任せるといったものである (Cowie, 2000)。その有効性については、ピア・サポートの利用者となる被害児童にとって様々な対人的スキルの学習に効果的であるとされている (Cole, 1999)。いじめ被害体験者の場合、青年期後期において対人的ストレスイベントに曝された際に自分よりも高い社会的スキルを備えた他者に助言を求めるといった行為は、ピア・サポートと同様に習得が遅れていた年齢相応の社会的スキルの学習を促進して適応状態を改善する働きがあるのではないかと考えられる。

なお、本研究の問題点として回顧的方法を採用したことによるデータの歪みについて触れておく必要があるだろう。本研究においては、ほとんどの質問項目に対して過去の出来事や心理的状态を想起して回答するように教示している。特に、いじめ被害体験に関する項目については、いじめを経験した時点と調査に回答した時点との間に数年間の開きがあり、回答の信頼性に疑問が生じる理由となっている。長期間に渡る記憶の安定性や信頼性に関する研究は主に自伝的記憶研究の領域で扱われてきたトピックであり、自伝的記憶は想起時に再構成される側面のあることが明らかになっている (高橋, 2000)。再構成的想起は想起時の感情状態等に影響を受けることから、質問紙に回答した時点の感情状態によってそれぞれの項目に対する評定値が変動した可能性が考えられる。この

問題を回避しつつ回顧的な方法を用いて調査を行うには、例えば過去にいじめを受けたことがあるという客観的な記録が残っている者を対象に数ヶ月間の追跡調査を行う等の方法が考えられるが、やはり児童期から数年間に渡ってサンプルを追跡する大規模な縦断的調査の実施が強く望まれるところである。

最後に、いじめ被害体験者とレジリエンスに関する研究の今後の展望について簡単に述べて本論を閉じることとする。本研究においては、Roth et al. (2002) に基づき、脆弱性因子として対人的ストレスイベントを、保護因子としてはコーピングスタイルを取り上げた。しかし、レジリエンス研究において取り上げられてきた要因には、特に保護因子の場合、個人内要因、家庭内要因、社会的要因の3種類がある (Masten & Reed, 2002)。本研究で取り上げたコーピングスタイルは個人内要因の1種であり、この他にもいじめ被害体験に関して保護因子として機能する要因がいくつか存在することが考えられる。今後はいじめ被害体験者に対する詳細な面接調査等を実施して他にも脆弱性因子及び保護因子として機能している要因がないか広く探索したうえで、それらの効果について検討していくことが求められる。

引用文献

- 坂西友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, **11**, 105-115.
- Bolger, K. E., & Patterson, C. J. 2003 Sequelae of child maltreatment: Vulnerability and resilience. In S. S. Luthar (Ed.), *Resilience and vulnerability: Adaptation in the context of childhood adversities*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 156-181.
- Clark, L. A., & Watson, D. 1991 Tripartite model of anxiety and depression: Psychometric evidence and taxonomic implications. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 316-336.
- トレバー・コール バーンズ亀山静子・矢部 文 (訳) 1999 ピア・サポート実践マニュアル 川島書店

- (Cole, T. 1999 *Kids helping kids: A peer and peer mediation training manual for elementary and middle school teachers and counsellors.*)
- Cowie, H. 2000 Bystander or standing by: Gender issues in coping with bullying in English schools. *Aggressive Behavior*, **26**, 85–97.
- Glantz, M. D., & Johnson, J. L. 1999 *Resilience and development: Positive life adaptations.* New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- 橋本 剛 1997 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, **13**, 64–75.
- Hawker, D. S. J., & Boulton, M. J. 2000 Twenty years' research on peer victimization and psychosocial maladjustment: A meta-analytic review of cross-sectional studies. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **41**, 441–455.
- Jew, C. L., Green, K. E., & Kroger, J. 1999 Development and validation of a measure of resiliency. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **32**, 75–89.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41–47.
- 神村栄一・向井隆代 1998 学校のいじめに関する最近の研究動向—国内の実証的研究から カウンセリング研究, **31**, 190–201.
- 香取早苗 1999 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, **32**, 1–13.
- Kobasa, S. C. 1979 Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1–11.
- Luthar, S. S. (Ed.) 2003 *Resilience and vulnerability: Adaptation in the context of childhood adversities.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Luthar, S. S., & Cicchetti, D. 2000 The construct of resilience: Implications for interventions and policies. *Development and Psychopathology*, **12**, 857–885.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. 2000 The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, **71**, 543–562.
- Luthar, S. S., & Zelazo, L. B. 2003 Research on resilience: A integrative review. In S. S. Luthar (Ed.), *Resilience and vulnerability: Adaptation in the context of childhood adversities.* Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 510–549.
- Masten, A. S., & Powell, J. L. 2003 A resilience framework for research, policy, and practice. In S. S. Luthar (Ed.), *Resilience and vulnerability: Adaptation in the context of childhood adversities.* Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 1–25.
- Masten, A. S., & Reed, M. J. 2002 Resilience in development. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of positive psychology.* New York: Oxford University Press. Pp. 74–88.
- 森田洋司・清永賢二 1994 新訂版 いじめ—教室の病い 金子書房 (Morita, Y. & Kiyonaga, K.)
- 岡安孝弘・高山 巖 2000 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, **48**, 410–421.
- Olweus, D. 1993 Victimization by peers: Antecedents and long-term outcomes. In K. H. Rubin, & J. B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood.* Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 315–341.
- Reynolds, A. 1998 Resilience among black urban youth: Prevalence, intervention effects, and mechanisms of influences. *American Journal of Orthopsychiatry*, **68**, 84–100.
- Roth, D. A., Coles, M. E., & Heimberg, R. G. 2002 The relationship between memories for childhood teasing and anxiety and depression in adulthood. *Anxiety Disorders*, **16**, 149–164.
- 佐藤 徳・安田朝子・児玉千穂 2001 3要因モデルに基づく、抑うつならびに不安症状の分類—多次元抑うつ不安症状尺度の作成 性格心理学研究, **10**, 15–26.
- 高橋雅延 2000 記憶と自己 太田信夫・多鹿秀継 (編著) 記憶研究の最前線 北大路書房 Pp. 229–246.
- Wagnild, G. M., & Young, H. M. 1993 Development and psychometric evaluation of the resilience scale. *Journal of Nursing Measurement*, **1**, 165–178.
- 2004. 6. 11 受稿, 2005. 6. 19 受理—

Resilience in a Personal History of Peer Victimization: What Factors Contribute to Victims' Adjustment in Young Adulthood?

Tsuyoshi ARAKI

Japan Society for the Promotion of Science/Department of Psychology, Faculty of Arts and Letters, Tohoku University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2005, Vol. 14 No. 1, 54-68

The aim of this study, based on the resilience perspective, was to investigate the effects of interpersonal stressful events (vulnerability factors) and coping styles (protective factors) on adjustment of young adults with a personal history of peer victimization during childhood. Participants were 301 Japanese young adults with a mean age of 19.7 years ($SD=1.29$). A questionnaire was administered, which included questions concerning memories of peer victimization during childhood, as well as three self-rating scales involving interpersonal stressful events, coping styles, and depression and anxiety. Results suggested that compared with non-victimized controls, young adults with a personal history of peer victimization during childhood had more problem adapting, although no difference was found in the levels of exposure to current interpersonal stressful events. This tendency was stronger for men than women, and the starting age of victimization made no difference in the adaptation problem. Results also showed that both problem-focused and support-seeking coping as a protective factor had a compensatory effect for long-term negative outcomes of victimization by peers during childhood.

Key words: resilience, peer victimization, coping, young adulthood